

久屋大通が名古屋を変える

豊富な公共空間を活かした都心の魅力アップ

石田 富男

名古屋の都心の両輪ともいえる名駅地区と栄地区。名駅地区が再開発の進展によって注目を集める中で栄地区衰退の懸念の声も聞かれる。栄地区の特徴を活かすことによって栄地区の魅力向上を図ろうと着目したのが久屋大通。河村名古屋市長の「久屋大通の公園化」が打ち出されている。栄地区のシンボルともいえる久屋大通。そのあるべき姿は、市民を巻き込んだ取り組みが始まった。

栄地区の危機感

名古屋圏の玄関口として脚光をあびる名駅地区。二〇二七年にはリニア新幹線が開通し、二〇四五年の名古屋―大阪間開業まで当面の終着駅となる。リニア景気を見込み名駅地区では様々な新ビル計画がすすむ。

「百貨店の売上だけをみて評価するのは間違い。多様な視点から見ると」との指摘もあるが、名駅地区の吸引力が強まり、栄地区から名駅地区への流れが加速しつつあるとみる人は多い。日本を代表する大企業が名駅地区の街づくり協議会に参画し活動を展開しているのも栄地区との大きな違いだ。ここの二、三年の間にテコ入れしないと栄地区の衰退は避けられないという危機感が広がっている。

個性あるエリアを結ぶ南北軸―久屋大通

かつては栄地区が名古屋の都心を代表していた。長い歴史を背景に老舗のまちとしての威厳が名古屋人を吸引した。その歴史ゆえに大規模な再開発が進まなかったともいえる。

しかし、一方ではごった煮のまちとして再生した「大須」やナディアパークをきっかけに再生し地域ぐるみのイベントを展開している「栄ミナミ」、若者によるストリートセレクトショップやフィリピン、韓国などの店が集中する「栄東」、高

級住宅地に個性ある飲食店が点在する「泉」、そして昔から名古屋の繁華街の名詞ともいえる「錦三」といった個性あるエリアが面的に広がり、それらを結ぶ南北軸として、豊かな公共空間である久屋大通がある。

名駅が駅を中心に垂直に伸びるまちを形成してきたのに対して大きな違いがあり、これこそが栄地区の大きな特徴であるともいえる。

久屋大通の将来像検討にむけた取組み

デジタル放送への移行によって名古屋テレビ塔は電波塔としての役割を終え、その存続が大きな課題となっている。登録有形文化財であり貴重な歴史資産として、また市民の思い出の場所としてその存続を望む声が多く聞かれる一方で、存続には多額の耐震改修費用がかかることから撤去を求める声もある。名古屋テレビ塔が魅力ある施設として有効活用されるためには久屋大通を含めた魅力アップが必要との声も多い。

名古屋のシンボルともいえる久屋大通のあり方を考える上では、久屋大通に対する市民の関心を高め、様々な意見を集めながら再生にむけた機運醸成を図ることが重要だと名古屋市総務局が検討調査業務のプロポーザルを行い、その業務を当社で担当させていただいている。

久屋大通とは

名古屋テレビ塔のある100m道路。公園と両側の道路を含めると東西110m、南北1738m。札幌の大通公園とよく対比されるが、「久屋大通」という名前は広く知られているとはいいがたく、「名古屋大通公園」に改称するという意見もある。

戦後の復興都市計画の目玉として、火災の延焼防止と避難所になることを目的に1963年に完成。2013年には50周年を迎える。名古屋テレビ塔は、日本初めての集約電波塔として道路整備と平行して建設された1954年に完成。1959年に復元された名古屋城天守閣よりも古い歴史を持つ。名古屋の歴史を象徴する資産ともいえ、名古屋市の歴史まちづくり戦略では、戦災復興により形成された資産を活かすとして「久屋大通の再生」と「テレビ塔の活用」が大きく打ち出されている。

また、銀のテレビ塔と緑の久屋大通は名古屋を紹介する風景として取り上げられることも多く、景観面でも重要な位置を占める。1983年に名古屋市の都市景観整備モデル地区の第1号に指定され、2007年には都市景観形成地区として景観計画に位置づけられ、景観形成基準による景観誘導が行われている。

公園部分はもと道路の中央分離帯としての緑地であったが、1970年に都市公園法に基づく公園となったもので、企業の寄付などによって徐々に整備されてきた。現在、一番古いのは1969年6月にできた希望の泉。1971～78年には地下駐車場や地下街の整備とあわせ改修工事が行われ、桜通以北には国際親善友好広場も整備された。1989年の市制100周年の節目を機会に、広小路通以南を対象とする全国規模の設計コンペが行われ、光の広場～エンゼル広場が整備・改修されている。緑が大きく成長し、都心のオアシスとして親しまれているが、施設の老朽化が進み、公園整備の点からも久屋大通公園の魅力アップは重要な課題としてとりあげられている。

まち歩きを楽しみたい

市民へのアンケート調査や久屋大通周辺の企業・市民団体へのヒアリングでは、久屋大通の景観やイベントでの賑わいに対する高い評価の一方で、憩いの場としての利用の少なさや周辺との分断、移動のしにくさといった点での課題があげられ、貴重な空間が有効活用されておらずもったいないという声が多い。

公園とまちがつながり、歩きやすく、歩きたくなるようにすることで多様な人々が集い、憩い、賑わう空間とするためにはどうしたらよいか。ワークショップや大学提案では様々なアイデアや工夫をこらした提案が出されている。将来像のモデルは「久屋大通がこんなふうに変わると楽しいだろうなあ」と夢を掻き立てる。道路をなくして公園として一体的に活用するという大胆な提案も、様々な課題がありすぐの実現は難しいが、知恵を集め市民の思いが一つになれば夢でなくなるかもしれない。久屋大通を軸に人々がまち歩きを楽しむ姿が目に見えよう。

そのステップとして、まずはより多くの市民に久屋大通の多様な魅力を知ってもらい、みんなの思いを実現する場として利用してもらうことが重要だろう。ひまわり展や子ども間伐体験といった取り組みは久屋大通の特徴を活かした魅力ある取り組みだ。このような取り組みがどんどん広がっていくことを期待したい。



久屋大通WSでの模型展示

ひまわり展 9/18

ひまわりを題材にしたアート作品を樹木の間に表示する取り組みも今年で7回目。姉妹都市からの作品も展示されている。緑と黄色のコントラストが美しい。いつもは静かな公園が華やいだ雰囲気になる。



子ども間伐体験 11/26

枝が重なり十分成長できずに生育不良になった樹木を間伐し、木々が大きく健全に育つようにするための環境づくり。その意義を知ってもらうための体験イベント。昨年のシドニー広場に続く2年目はリバーパークにて。いつもは静かな公園が子ども達にぎわっていた。都心で子ども達が自然とふれあい学べるような場として、久屋大通が利用されることを期待したい。

